小高　健 著
『日本近代医学史』

幕末から戦後の新制大学設置までの日本の医学について多数の文献を使用して詳細な記述を行っている大部の著作．内科や外科などの医学の各学科を単位として記述するのではなく，制度や各時期における重要な学術研究の変遷を中心に，時系列に沿いながら近代の医学全般の展開を扱っている．特に北里柴三郎と彼に関連する研究機関については，従来の理解の不備を指摘しながら，歴史上の位置づけを行っている．

【内容】

第1章　西洋医学の系譜　1
第2章　ドイツ医学の採用　23
第3章　医学教育の複線化　53
第4章　医学研究の始まり　75
第5章　帝国大学の創設　109
第6章　細菌学の勃興　125
第7章　癌研究の始まり　151
第8章　外国で行われた研究　165
第9章　明治期のその他の研究　187
第10章　伝染病研究所の移管　195
第11章　第一次世界大戦の影響　233
第12章　感染症・癌・脚気の研究　259
第13章　大正期のその他の研究　279
第14章　戦争への傾斜　297
第15章　公衆衛生院の創設　313
第16章　結核の研究　333
第17章　感染症・癌・脚気の研究（続）　357
第18章　ペニシリンの開発　391
第19章　昭和前期のその他の研究　413
第20章　原子爆弾災害調査　431
第21章　予防衛生研究所の創設　461
第22章　疫痢の研究　485
第23章　アメリカ医学の台頭　499
第24章　占領軍による医学教育改革　529

（澤井　　直）

［考古堂書店，〒951-8063 新潟市中央区古町通4番町563番地，TEL. 025（229）4058（代表），2011年7月，A5判，599頁，8,000円＋税］

G. ペルトナー 著，枡形公也 監訳
『医療倫理学の基礎』

原書はウィーン大学で行った講義とゼミに基づいて書かれた．本書は現象学的な人間学を専門とする著者が，権利と徳に関する義務の区別，公平性，人格理解に関して功利主義の不備を指摘し，現在の医療に関する様々な倫理的問題に対して分析を行い，明確な解答を行っている．日本語の医療倫理学関連の書籍の多くが英米系の功利主義の立場から書かれているのに対し，本書は大陸的―ヨーロッパ的な倫理学の伝統に基礎を置いている．歴史的事例は乏しいが，医に関わる諸問題を捉える新たな視点を与えてくれる．

【内容】

1. 医療倫理学の概念と課題　1
2. 倫理学的な判断形成の方法　24
3. 医療倫理学の規範的な基礎づけ　39
4. 身体的−人格的存在者としての健康な人間と病気の人間　55
5. 医師−患者関係　83
6. 治療的実験−人体実験−倫理委員会　107